

## 14章

# 「稲むらの火」のモデル 濱口梧陵

人間愛と機転に満ちたハードとソフトの適応策

大辻永 | Otsuji Hisashi

### 1 はじめに

本章では、過去に起きたある津波災害とその復興を例に、将来の津波襲来に備えた適応策について、そのハードとソフトの両面から迫ってみたい。ここでハードとは津波堤防であるが、ソフトな適応策とは何か。それは、人々の間に記憶され、継承されるものである。教訓、物語、紙芝居、教科書、祭。さまざまな形態をとって、人の心に構築される適応策である。また、取り上げる例の中では、適応策を実行した人物の隠された人間愛について迫ってみたい。

### 2 「稲むらの火」の物語

ゆったりとした地震があった。ある村の庄屋の老人は、高台の自分の家から海が引くのを見て、「津波が来る」と直感する。村では秋祭の準備で、地震には気づかないようであった。老人は、機転を利かせて自分の田圃の「稲むら」に火を放ち、村人を高台に招いた。しばらくすると津波が押し寄せ、高台に集まった一同はその難を免れた。

これが「稲むらの火」として有名な物語のあらすじである。『小学国語読本（5年）』（写真14-1）に1937年から1947年まで掲載され、この物語を記憶する人も不思議なほど多い。



写真 14-1 「小學校國語讀本」

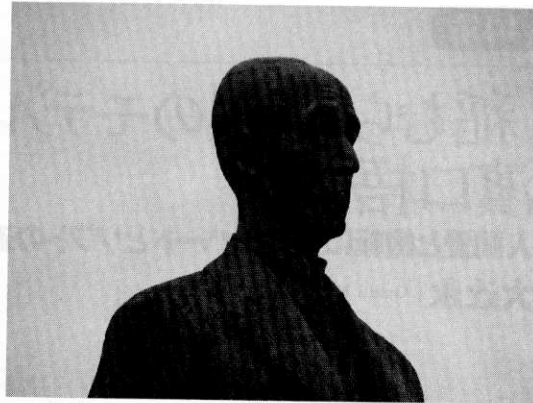


写真 14-2 濱口梧陵

### 3 物語の成立

この物語が小学校の教科書に掲載されるには、いくつかの条件が重なっている。第一に、モデルになった地震があった。安政南海地震（M8.4, 1854. 11. 5 旧暦）である。そして、実際に松明で稲むらに火を放ち、村人の命を救った人物がいた。紀州広村（現在の和歌山県広川町）の商人、濱口梧陵（1820-1885）という人物である（写真 14-2）。しかし、「稲むらの火」を記憶する方々も、これが実話に基づいていたことを知る人はほとんどいない。第二に、梧陵が地元の人から「生き神様」として崇められていたのを知った小泉八雲（1850-1904）が、明治三陸地震（M8.5, 1896. 6. 15）の惨状を耳にし、梧陵をモデルに“A Living God”（英文, 1897）という作品を書いたということがあげられる。「稲むらの火」で描かれた「ゆったりとした地震」は明治三陸地震の揺れ方であり、梧陵が実際に経験した、激震の安政南海地震ではなかった。その後、小泉八雲の小説を基に世界各地で教材や物語が作られる。東南アジアやインドでも「ハマグチ」の名が知られている。第三に、中井常蔵（1907-1994 広村に隣接する湯浅の出身）という青年教師が、小泉八雲の作品を基に文部省の公募に応募し採択され、国語教材として「稲むらの火」は実現した。

### 4 「稲むらの火」復活

「稲むらの火」は 1970 年代に完全に教科書から消え、地元を除いて忘れ去られつつあった。それが、日本海中部地震（M7.7, 1983. 5. 26）の津波により小学生の集団が犠牲になった折、この教材が教科書に残っていれば防げたのではないか、という指摘がなされた（伊藤, 2005）。また、兵庫県南部地震（M7.3, 1995. 1. 17）やスマトラ島沖地震（M9.0, 2004. 12. 26）、その直後に開催された国連防災会議（2005. 1. 18 神戸）で当時の小泉純一郎首相が触れたことなどから、「稲むらの火」が見直されるようになった。

### 5 ソフトな適応策としての教科書

「稲むらの火」で庄屋の老人五兵衛として描かれた濱口梧陵は、当時 34 歳であった。梧陵は、実際は半身を津波に浸かりながら逃げ延び、道ばたの稲むら十数りに使用人に火を付けさせた。暗がりの中を漂流している者に、安全な場所を示そうとしたのである。高台は広八幡という神社にあたるが、この海拔は 10 メートル程度しかない。このように、教科書と実話とは異なる点が多々ある。しかしここでは、文部省の教材に採択され、多くの人の心に残った事実を重視したい。

この物語の何が魅力なのか。地元広川町で「梧陵さん」の語り部として知られる、清水勲氏は以下の点をあげる。

第一に出だしが巧みである。古い昔話であれば、「むかしむかし」で始まるどころ、「これは、ただ事でない」として読者を引きつける（原文は <http://www.inamuranohi.jp/> などを参照）。清水氏が中井氏に生前この点を正したとき、中井氏も喜んで「この当時、このような出だしのものはなかった」と、にこやかに語られたそうである。第二に、海を見たことさえない子どもが多かった時代に、海が引くという光景が描かれる。子どもの想像力を目一杯働かせる授業がなされたのであろう。第三に、食料が豊富でなかった時代、

貴重な自分の稲に火をつけるという行為が、幼心に衝撃的であったという。第四に、戦争色が強くなってきた時代にあつて、その深い人間愛が子ども達の心に響いたとも指摘される。しかし逆に、称えられるべき自己犠牲に焦点が当てられ、軍国主義時代の教育に馴染むものでもあった。

ところで、「村八分」という言葉がある。一説によると、火事と葬式の二分を残して関係を絶つ、我が国の古典的な風習という。火事を起こせば人が集まるということは、現代よりもずっと見込みのある手立てであったことは確かで、この物語を成り立たせる重要な前提である。

このように「稲むらの火」は、その時代や社会、文化にあった作品であった。長い時間が経っているのに、なぜ多くの人々の間に記憶され、継承されているのかと問うことは、自然災害の教訓を後世に残す手がかりを得る手立てとなる。そして、「自然災害の教訓を残す」こと自体、人の心に構築されるソフトな防災対策、適応策として重要なのである。

## 6 濱口梧陵のハードな適応策

「稲むらの火」は地震とそれによる津波の話であるが、モデルである梧陵はその後の村の復興に特筆すべき点がある。

濱口梧陵は今でも続く醤油屋（ヤマサ醤油）の七代目当主で、地元広村の名士であった。江戸と銚子に店と工場を構え、和歌山との間を往復していた。当時、銚子は海運の要所であり、関東では江戸に次いで栄えていたという。梧陵は銚子で三宅良斎や関寛斎といった蘭学医たちと親交を持ち、生涯にわたって彼らを支援していた（この重要性は後述する）。

「陽明学を小さい頃に学んでいたからです」と清水氏は語る。「仁の心。人のためにという心が大事で、世のためにならなければ学んだ意味がない」と梧陵は考えていたという。その仁の心の結晶が、私財を投じての広村堤防の建設につながった。

梧陵は、津波の後、広村全体を将来の津波災害から守る堤防建設を紀州和歌山藩に願い出た。しかし、多くの村が罹災した中で、財政難にある藩が一村のために多額な資金を出すこともない。梧陵は、資金は自らが供出すると

し、番頭と衝突しても堤防建設計画を実行に移した。

彼が計画した堤防は全長900メートル、高さ4.5メートル、上底7.2メートル、根幅20メートルで、資金は1500両を見込んだ。「生き神様」として郷土の人々が彼を崇めていた第二の理由は、正にこの堤防にあった。NHK「その時歴史は動いた」でも取り上げられ、再放送が重なるほどの反響を呈した（2005.1.12、10.26、11.3,4）。

着工は罹災直後の1855年2月、一応の完成を見たのは1858年12月で、工期はほぼ4年にのぼる。結局、梧陵は2000両を越える資金を提供し、長さ670メートルの当時世界最大級の津波堤防が完成した。

広村堤防にはさまざまな工夫がある。第一に、堤防の村側に櫓を数百株、海側には松数千本を植えた。櫓からは木蠟が採れ、現金収入を見込んだ。松は根が張り堤防を丈夫にし、波の威力を少なくする。もちろん、こういった智慧は、もっと古くから川の洪水対策（川除）などで応用されてきたものである。

第二に、堤防は漁師の田圃の上に建てられた。清水氏の話によると、ここで採れた米を加子米と呼ぶ。漁師は漁で儲けていたが、その田圃に藩から高税率をかけられていた。このような田は、つぶしてしまう方が後々負担にならない。

第三に、老若男女、誰でも堤防造りに参加できるよう、その賃金は日当で支払われた。当時は盆と正月に賃金が支払われるのが普通であったという。このことも手伝って、日に400から500人、のべ5万6736人の手で広村堤防は完成した。広村は当時300から400戸であったことを考えると、村人が総出で構築したと言っても間違いではない。

梧陵は堤防建設以外にも、農具を提供したり、罹災した家族らに仮小屋を50軒建てたり、橋を架けたりして村の復興にあたっている。

## 7 祭りというソフトな適応策

広村堤防の地元、和歌山県広川町では、「津浪祭」が毎年11月3日に催されている。村を守る広村堤防を造った濱口梧陵と、後世の人々の安全を祈っ

